

## 就学前児の社会的認知的発達に関する縦断的研究(1) - 4 社会的場面における自己制御機能の発達

鶴川女子短期大学	佐藤淑子
白百合女子大学	目良秋子
文京学院大学	柏木恵子

### Longitudinal Study on the Social and Cognitive Development of Japanese Pre-school Children (1)-4 Development of Self-Regulation in Interpersonal Conflicts

Tsurukawa Women's Junior College	SATO, Yoshiko
Shirayuri College	MERA, Akiko
Bunkyo Gakuin University	KASHIWAGI, Keiko

就学前児の社会的場面における自己制御機能の発達の縦断的研究の4回目の報告である。今回は調査を行ってきた幼稚園から保育日誌を提供していただいたので、これまでの教師による幼児の自己制御機能の発達の評定のデータ及び幼児を対象とした絵画自己制御機能テストのデータと合わせた分析結果を報告する。

分析の結果、子どもの自己抑制の発達と日誌の否定的コメントの間には負の相関が見られ、抑制の低い子どもほど否定的コメントが多くなる。また日誌の否定的コメントは3年間を通じて性差が見られ、女兒よりも男児が有意に多い。

**【キー・ワード】** 就学前児、自己制御（自己主張、自己抑制）、対人葛藤場面

This is the fourth report of studies on the development of self-regulation of Japanese pre-school children in interpersonal conflicts. Because of the kindness of the headmaster of the kindergarten where we conducted our study, we had privilege to study the record of childcare of three years.

In the assessment of children's social behavior, usually one of the next three scales is used: evaluation in questionnaire by teachers or parents, observation in natural settings by researchers or teachers and self report by children using tests or inventory. In this study as we could get all these three types of data on our subjects of 20 pre-school children, we would like to explore the correlation between these three scales.

The results suggested a strong correlation between the development of self-inhibition in pre-school children and the assessment by teachers either in questionnaire or in observation.

We could not find any correlation between assessment by teachers and children's self report (PSRT). Teachers recognized boys as having more problems in social behavior than girls in the kindergarten.

**【Key Words】 Pre-school children, Self-regulation(self-assertion, self-inhibition), Interpersonal conflicts**

## 目 的

これまで就学前児の社会的場面における自己制御機能の発達についていくつか報告をしてきた(佐藤ほか, 1998, 1999, 2001; 佐藤, 2000)。

新しいデータとして本研究に協力をいただいた幼稚園から筆者らが調査と実験を行った時期の保育日誌を提供していただいた。保育日誌は毎日の保育の記録であり, また保育者の目が捉えた個人の発達の記録でもある。保育日誌はこれまで質的に分析されることはあっても, 量的データとして扱われることは少なかったのではないかと。

教師による幼児の自己制御機能の発達の評定のデータと幼児を対象とした絵画自己制御機能テストのデータを分析してきたが, 今回はこれらのデータと保育日誌を量的に分析したデータを合わせて, 幼児の自己制御機能の発達を検討してみたい。

## 方 法

これまで報告してきた絵画自己制御機能テスト(PSRT)と教師による子どもの自己制御機能の発達の評定(TQ)に、保育日誌の分析を加える。

本研究に協力いただいた園では複数担任制をとっており保育日誌も2人の教師によって書かれている。但し2人の担任のうち一人の先生は持ち上がりで3年間同じ組を見ている。したがって1997年から1999年までの3年間の保育日誌は4人の先生によって書かれたものである。園の教育方針としては、自分と相手の個性を認め合うこと、子どもの意欲を尊重すること、子どもの努力のプロセスを重視することなどが挙げられている。

本研究はS組とN組の2つのクラスを縦断的に3年間調査しているが、今回は男児10人、女児10人と男女比のバランスのよいS組の分析結果を報告する。

まず日誌の記述の中から子どもについての肯定的および否定的なコメントを拾った。カウントの基準としては事象ごとに1単位として数えた。たとえば一つの文章の中に「一番に登園、喜んで入室、砂場でじっくり遊ぶ」と書かれていれば肯定的コメント3とカウントする。

否定的コメント、肯定的コメントとしてカウントしたものを表1に挙げた。またカウントしなかったものは親に関する記述や体調管理、登園の時間帯など親による規定要因が強いと考えられるものである。先生のその日の保育全体に関する感想、解釈、教育方針への言及などもカウントからはずした。

表 1. 肯定的 (Positive) 及び否定的 (Negative) コメントとしてカウントした事象

Negative Description	Positive Description
母子分離 離れられない,母親を思い出している	自主的に取り組む
排泄のコントロールできない おもらし,オムツ	積極的に片付ける
一斉にすることに参加しない	遊びに工夫がある
食事 食べすぎ (適量を食べるのが良い)	衣服の着脱が一人でできる
忘れ物 (自己管理できない) ハンカチない	おもちゃを友だちと共有して遊べる
主張すべきところで主張できない	表情が豊か
抑制すべきところで抑制できない	課題・遊びに集中できる
泣く ケガして泣くなどは,カウントしない	気持ちをコントロールできる
泣きやまない,泣き続ける,フラストレーションで泣くなどはカウント	頼まれたことや,友達の助けを率先してやる
課題ができない	人の話をきちんと聞ける
逸脱行動	あきらめず最後までがんばれる
「幼稚園行かない,イヤ」などと言って,登園してくる,登園時に泣く	リーダーシップをとれる
不安そうに教師のそばにいて離れられない	お弁当を残さず食べる
遊びに誘ってもものらない	自分の欲求を先に延ばすことができる
執着,独占	先生の言うことに素直に従える
集中できない	友だちとのトラブルにも自分なりの解決ができる
怒ってぐずりだす	当番など自分の仕事を責任をもってきちんとやる
いじめる	声も大きく,言葉がはっきりとしている
対人緊張	幼稚園に喜んで登園する
納得できず大騒ぎ	楽しそうに遊ぶ
友だちが遊んでくれないと悲しむ	
トラブルを起こす	

上記の基準に従い、20人の対象児全員について個別に肯定的および否定的コメントを抜き出した。その際に別の子どもに記載に出てきた子ども、たとえば「AちゃんとBちゃんが一緒に楽しく遊んだ」という肯定的コメント「AちゃんとBちゃんが一緒になってふざける」というような否定的コメントはそれぞれの対象児で同時にカウントした。

## 結果と考察

### 1. 肯定的コメントと否定的コメントの出現回数

肯定的コメントと否定的コメントの出現回数を個人別に図1に表した。否定的コメントが3年間の合計で最高に多い子どもは男児で305、もっとも少ない子どもは女児で29ある。保育日誌での否定的コメント出現回数にこれほどレンジがあることは興味深い。一方、肯定的コメントのほうは、3年間の合計のレンジは19から104で、否定的コメントのような著しい個人差は認められない。

まず、否定的コメントの出現回数には性差が見られる。男児と女児の出現回数の平均値をT検定したところ、5%のレベルで男児のほうが女児より有意に多い(表2参照)。そしてこの傾向は年少、年中、年長のどの時期でも変わらない。一方、肯定的コメントの出現回数には3年間を通じて性差は認められなかった。

表1に示した否定的コメントとしてカウントした事象の中でも特に多いのは逸脱行動や抑制すべき場面で抑制できない言動への言及である。つまり対人トラブルの記述が多いのは男児であり、そのために男児の否定的コメントの出現回数は多くなっている。幼稚園ではないが、保育園の幼児のトラブルに関する研究においても、年少から年長のどの年齢でも、男児のほうが女児より対人行動のトラブルを起こす傾向があることが報告されている(金子ほか, 1977)。

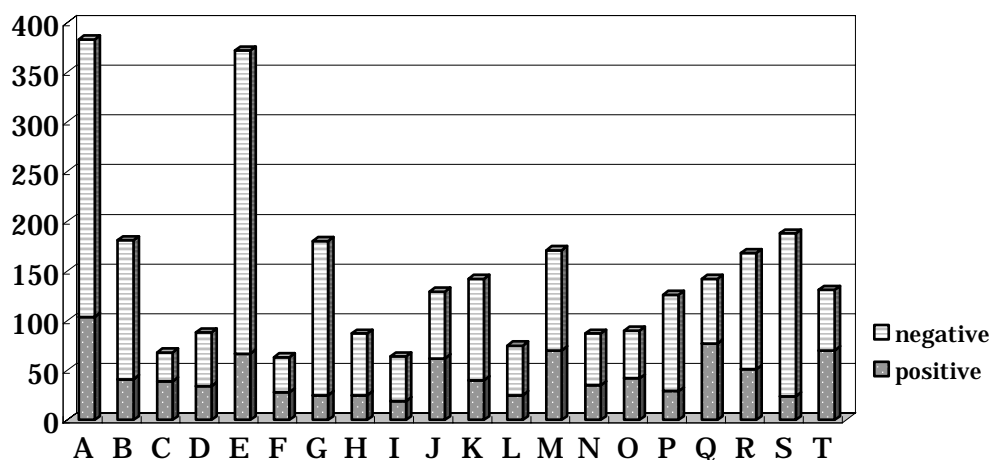


図1. 肯定的、否定的コメントの出現回数

表 2. 日誌記述の性差による比較

	男児平均 ( <i>S.D.</i> )		女児平均 ( <i>S.D.</i> )	<i>t</i> 値	Prob.
年少 NEG	41.5 (23.27)	>	23 (10.97)	2.27	*
年中 NEG	47.5 (36.27)	>	20 (6.83)	2.36	*
年長 NEG	49.1 (37.19)	>	21.7 (14.86)	2.16	*
3 年 NEG	138.1 (92.36)	>	64.7 (26.94)	2.41	*
年少 POS	16.3 (6.98)		14.4 (8.96)	0.53	<i>n.s.</i>
年中 POS	19.3 (12.96)		17.1 (14.37)	0.36	<i>n.s.</i>
年長 POS	12.9 (8.44)		10.7 (6.18)	0.67	<i>n.s.</i>
3 年 POS	48.5 (24.16)		42.2 (21.80)	0.61	<i>n.s.</i>

\*  $p < .05$ 

また否定的コメントの総数は年少から年長まで増加していく。年少では 645, 年中では 675, 年長では 736 である。これはおそらく、保育者が子どもに求める発達の水準が漸次高くなっていくと解釈できる。年少のときにはできなくても容認された行動が、年中、年長と年齢が上がっていくにつれて保育者の目にとまるような逸脱行為となっていくということであろう。つまりこれは保育者の子どもに対する発達期待が高くなっていくことでもある。一方、肯定的コメントのほうは年少では 307, 年中で 364, 年長では 236 とばらつきがある。

## 2. 子どもの社会的場面における自己制御機能を測る 3 つの評定方法

さきに述べたように本研究では、子どもの自己制御機能の発達を測るために以下の評定方法を用いてきた。

### 絵画自己制御機能テスト (PSRT)

絵画自己制御機能テスト (PSRT) についてはこれまで何回か報告してきた (佐藤ほか, 1998, 1999, 2001; 佐藤, 2000)。自己主張と自己抑制各 1 場面ずつのテストの組み合わせ 2 種類をそれぞれ年に 1 回ずつ、計、年に 2 回のペースで 3 年間実施してきた。「花いちもんめ」(自己主張)と「ブランコ」

(自己抑制)の組み合わせを実験1、「砂場」(自己主張)と「花びん」(自己抑制)の組み合わせを実験2とした。この絵画自己制御能力テストから、ここでは子どもの自己評価による絵画自己制御能力テストの成人の判断と一致した回答数(主張場面では主張すると答え、抑制場面では抑制すると答えた数)を一つの指標として用いた。実験1と実験2を3年間実施したので、年少から年中まで自己主張場面と自己抑制場面それぞれ6回のデータがある。

教師による質問紙法を用いた子どもの自己制御の発達の評定(TQ)

1年に4回ずつ、園児の自己主張に関する5項目、自己抑制に関する6項目、協調性に関する5項目の計16項目の質問項目についての評定を得ている。S組では1997年の年少の秋から1999年の年長の秋まで計5回の評定のデータが得られた。今回はその中でも自己主張と自己抑制の尺度(表3参照)を分析に用いた。

教師による子どもの社会的行動の自然観察(保育日誌のデータ)

今回の日誌であるが、ある意味で教師による子どもの幼稚園の場面での行動観察の記録であるといえるのではないだろうか。もちろん先に書いたように、子どもの否定的コメント一つをとっても、構造化された行動観察とは異なり、観察する行動のコードもなければ、タイムサンプリングをしたわけでもない。しかしながら長い間保育に関わってきたベテランの優れた保育者の観察記録は幼稚園の場面での子どもの社会的行動を如実にとらえているということもいえるのではないかと考えた。

Michelsonら(1987)は子どもの社会的スキルのアセスメントについて次のように論じている。

「社会的スキルを査定するための様式は大別すると行動観察、情報提供者の報告、そして自己報告の3つである。通常行動観察には、自然場面で社会的行動を観察する方法と役割演技テストのように模擬場面で制限した形の社会的行動を観察する方法がある。情報提供者の報告は、子どもの社会的環境の中で社会的スキルの実行を評価し、記述し、評定する教師、仲間、親の力を借りる必要がある。

表3. 教師評定項目

自己主張	1 競争心からでなく自分のやりたいことをやり通そうとしてがんばる
	2 遊び方に自分のアイデアをもっている
	3 新しい遊びや難しそうな課題に興味をもつ
	4 他の子どもと意見が違うときに自分の意見を主張できない*
	5 いやなことはいやとはっきり言えない*
自己抑制	1 悲しいことやつらいこと、くやしいことなど感情をすぐ爆発させ、抑えられない*
	2 自分の思い通りにならない事があると不機嫌になったり、泣いたり、友達をたたいたりする*
	3 友だちのけんかが起きるとその原因のいかにかわからず自分の仲良しの方に味方する*
	4 劇やごっこ遊びの役決めるとき、自分の思い通りにならないと我慢できない*
	5 集団で何かするとき自分勝手におしゃべりしていることが多い*
	6 自分が遊んでいたものを友だちが貸してほしいと言ったとき、気持ちよく貸してあげられる

\* は逆転項目

・・・質問紙，尺度，筆記式の目録などのような自己報告測度は，それぞれの子どもによる自分の社会的行動に関する評定，評価，記述に基づいている。」

Michelson らが述べるように，行動観察，情報提供者の報告，自己報告はいずれも方法論や実践に関わる問題を含んでおり，またそれぞれの利点と限界がある。Michelson らによれば，行動観察の問題点は観察者間の判定の仕方に差が見られたり，観察者間の一致が得にくいなどの問題点があるが，子どもの日常の社会的行動を極めて正確に捉えているという利点がある。また，情報提供者特に教師の報告や評定は，子どもに社会的スキルを「使わせる」立場にいる人なので，彼らが子どもの社会的行動をどのように見ているかを知ることは重要な情報になる。欠点としては評定に一貫性を欠き，変化しやすいことなどが挙げられる。そして，自己報告については，子どもが自分の社会的行動をどのように捉え，報告するかのデータを得ることができるが，子どもたちが口で報告したことと実際にやっていることとの間に対応関係があるのかどうかという点にある。

さて，本研究では，研究対象が幼児であったことから，社会的スキル，あるいは社会的場面における自己制御の発達を測定することには，いくつかの困難を伴ったことは事実である。しかしながら，行動観察，情報提供者の報告，自己報告の3つが同じ被験者群について同時に得られたという点では，貴重なデータであるといえるだろう。そこで，これら3つのアセスメントのデータについてその対応関係を見ていくこととする。

#### (1) 3つの尺度の相互相関

表 4. 日誌・教師評定・子どもの自己制御の相関

	日誌 POS	日誌 NEG	TQ/ASS	TQ/INH	PSRT/ASS	PSRT/INH
日誌 POS	1.00					
日誌 NEG	0.48 *	1.00				
TQ/ASS	0.23	0.41	1.00			
TQ/INH	- 0.32	- 0.77 ***	- 0.50 *	1.00		
PSRT/ASS	0.10	- 0.35	- 0.19	0.39	1.00	
PSRT/INH	- 0.16	0.03	0.06	- 0.07	0.11	1.00

\*  $p < .05$     \*\*\*  $p < .001$

上述の3つの評定の相互相関を見たものが、表4である。まず3年間のデータをまとめたものを見る。教師評定による子どもの自己主張と自己抑制には5%の水準で負の相関が見られる。教師評定による子どもの自己主張と自己抑制に負の相関が見られるということは、教師が子どもの自己制御機能の発達を捉えるときに自己主張と自己抑制を相反するものとしてみている可能性がある。つまり、自己主張の高い子どもは自己抑制が低い、あるいは自己主張の低い子どもは自己抑制が高いというような捉え方をしている傾向にある。

次に、教師評定による子どもの抑制の発達と日誌の否定的コメントの間には、0.1%の水準で強い負の相関が見られる。つまり日誌で否定的コメントが多い子どもは、教師評定による自己抑制の発達が低い子どもである。教師にとって気になる幼児の逸脱行動が、自己抑制の失敗にあるといえるのではないだろうか。そしてさきに述べたように否定的コメントの出現回数に性差がみられるということは、教師の自然観察では男児より女児の自己抑制の発達を高く捉えている傾向があるといえるのではないだろうか。質問紙の教師評定でも、自己主張については性差が見られないのに対し、自己抑制については女児の年長児の平均値が男児より5%の水準で高いのである(表5参照)。

それでは、年少から年長まで、年齢ごとの分析を見る(表6参照)。まず、年少のデータではTQの自己主張と自己抑制の間には0.1%の水準で強い負の相関が見られる。そして、教師評定による子どもの抑制の発達と日誌の否定的コメントの間には、0.1%の水準で強い負の相関が見られる。日誌の否定的コメントの出現回数が多い子どもはTQの自己抑制が低い子どもである。PSRTの自己主張と教師評定の自己抑制の間に0.1%の水準で強い相関が見られる。この年齢ではPSRTの質問の意味

表5. 性差による教師評定の比較

	男児	女児	T 値	Prob
年少主張	2.83 (0.47)	2.77 (0.43)	0.32	
年中主張	2.74 (0.45)	2.86 (0.35)	- 0.71	
年長主張	2.81 (0.40)	2.92 (0.33)	- 0.67	
年少抑制	2.38 (0.69)	2.75 (0.30)	- 1.56	
年中抑制	2.54 (0.72)	2.82 (0.34)	- 1.12	
年長抑制	2.41 (0.50)	< 2.82 (0.34)	- 2.15	*

\*  $p < .05$



表 6. 学年別にみた日誌・教師評定・子どもの自己制御の相関

上段：年少 中段：年中 下段：年長

	日誌 POS	日誌 NEG	TQ/ASS	TQ/INH	PSRT/ASS	PSRT/INH
日誌 POS	1.00					
日誌 NEG	0.31 0.34 0.65***	1.00				
TQ/ASS	- 0.08 0.26 0.31	0.19 0.37 0.45*	1.00			
TQ/INH	- 0.15 - 0.22 - 0.50*	- 0.71*** - 0.74*** - 0.73***	- 0.65*** - 0.46* - 0.27	1.00		
PSRT/ASS	0.14 0.18 - 0.31	- 0.24 - 0.29 - 0.26	- 0.43 0.17 0.12	0.63*** 0.03 0.26	1.00	
PSRT/INH	- 0.20 - 0.24 0.36	- 0.28 0.07 0.35	0.15 - 0.05 - 0.11	0.17 0.00 - 0.39	0.28 - 0.25 - 0.16	1.00

\*  $p < .05$  \*\*\*  $p < .001$ 

を理解することができない子どももいたので(佐藤ほか, 1998), 質問の意味を理解し自分の考えを言語化して答えることができるしっかりした子どもは教師から見ると自己抑制の発達した子どもだったのではない。

年中のデータでも TQ の自己主張と自己抑制の間には 5% の水準で負の相関が見られる。教師評定による子どもの抑制の発達と日誌の否定的コメントの間には, ここでも 0.1% の水準で強い負の相関が見られる。

年長のデータでは, TQ の自己主張と自己抑制の間には年少や年中のデータに見られたような有意な負の相関が見られない。ここにきて, 自己主張と自己抑制は教師評定で独立した尺度として現れてくるようである。教師評定による子どもの抑制の発達と日誌の否定的コメントの間には, やはり 0.1% の水準で強い負の相関が見られる。その一方で, 教師評定の抑制の発達と日誌の肯定的コメントの間には 5% の水準で負の相関が認められる。抑制のきいた子どもは, 否定的コメントも少ないがまた, 肯定的コメントを受けることも少ないのである。さらに, 年長では日誌の否定的コメントと肯定的コメントの間には 0.1% の水準で強い相関が認められるのが特徴的である。ということは, 幼稚園の最

終の段階になると良くも悪くも教師から注目され保育日誌の記述に載る子どもと、そうでない子どもがいるということがいえるだろう。否定的コメントの多い子どもの肯定的な部分を認めようとする保育者の意識の現れであるともいえるのではないか。

そのほかには有意な相関は見出されなかった。子どもの自己評価である絵画自己制御能力テストの成人の判断と一致した正反応の数と、TQの教師評定および教師の日誌による行動観察の間には相関は見られなかった。つまり、教師によるアセスメントであるTQと日誌のコメントには対応が見られるが、PSRTの子どもの自己評価の間には対応関係が認められなかった。

(2) 自己制御の型と日誌の否定的コメントの出現回数

さらに、教師による自己主張と自己抑制の評定の3年間の平均値の順位からそれぞれ25パーセントタイルと75パーセントタイルに含まれる子どもを取り出した。20人中の順位を指標として主張では75パーセントタイルにいるが、抑制では25パーセントタイルにはいる「主張型」の子ども、逆に主張では25パーセントタイルにいるが、抑制では75パーセントタイルにいる「抑制型」の子ども、両方が下位5,6名の位置に属する「両低型」の子どもなど、自己制御の発達の型と、日誌の否定的コメントとの対応関係を見た(表7参照)。すると、日誌の否定的コメントが20人中最も多い子どもと、二番目に多い子どもは「主張型」の子どもであり、3番目と4番目に多かった子どもは「両低型」の子どもであった。一方、「抑制型」の子どもは日誌の否定的コメントでは15位と17位に位置し、きわめて少ない層に属するのである。つまり、自己主張と自己抑制のバランスが主張に偏った時、教師はその社会的行動を否定的にとらえる傾向にあるといえるだろう。

表7. 自己制御タイプと日誌 Negative 記述の出現回数

自己制御タイプ	園児	日誌 Negative 記述 の出現回数
<b>主張型</b>	T	279
主張 High 抑制 Low	P	305
<b>抑制型</b>	G	52
主張 Low 抑制 High	F	48
	D	65
<b>両低型</b>	N	165
主張 Low 抑制 Low	B	164

(3) 教師評定は変わるか

教師による自己主張と自己抑制の評定により、3年間の変化を見ると、年少から年長まで3年間自己主張と自己評定の75パーセントタイルに入る子どもの顔ぶれはそう変わらない。たとえば、自己主張の評定で75パーセントタイルに入る3人の男児は3年間変わらないし、自己抑制の評定で75パーセントタイルに入る2人の男児と2人の女児も3年間変わらないのである。これはまた、教師評定が相対的に低い25パーセントタイルに入る子どもについても同様で、自己主張の評定では女児1人と男児1人、自己抑制の評定では男児3人が3年間この層に位置している(図2-1,2-2参照)。

幼稚園の3年間では自己主張と自己抑制の順位が上位と下位25%の層で変わらない子どもがこれだけ多いということは何を意味するのだろうか。一つには子どもの自己制御、あるいは社会的スキルのパターンが入園時にはっきりしている子どもは3年経ってもあまり変化しないという可能性がある。また、さきに述べた保育日誌の否定的コメントが多く教師評定で自己主張の強い数名の子どもは保育者から注目され、トラブルへの介入や教育を個別に受ける機会も多いのであるが、保育日誌の記述では年長の3学期になっても、その攻撃行動については絶えず言及され続けている。この点については前出の金子ほかも、特定の幼児ばかりがトラブルを起こすなど、保育園という同一環境内で起こすトラブルの頻度や程度が個人によって異なってくるということは、家庭内の親の養育態度が幼児の社会性に及ぼす影響がある可能性を示唆している。

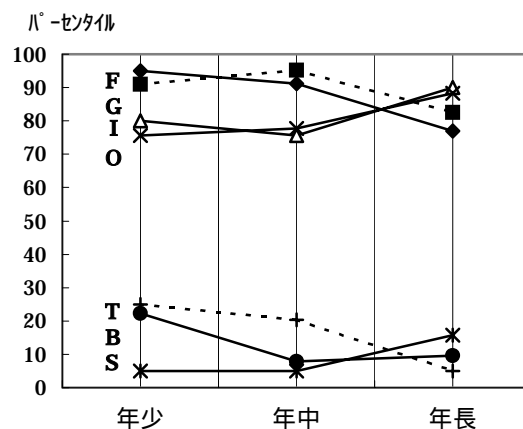
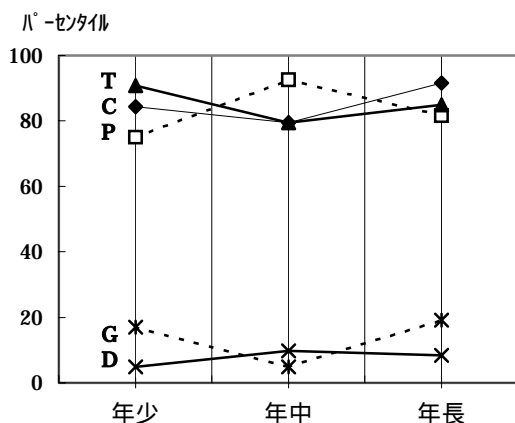


図2-1. 教師評定の3年間の推移(自己主張) 図2-2. 教師評定の3年間の推移(自己抑制)

注) 図中のアルファベットは、図1の子ども個人を表わす。

#### (4) 保育と子どもの自己制御の発達

これまでのデータ分析から見えてくることは、保育者が子どもの自己制御の発達を捉えるときに、子どもの自己主張の側面より自己抑制の側面に注目していることが挙げられる。さらに日本の一般的な社会の価値態度を反映して(佐藤, 2001), 子どもの自己主張と攻撃性の境界線のとらえ方があいまいであることも考えられる。

また、自己抑制の発達に見い出される性差から、保育者が幼稚園の集団場面で男児の攻撃行動を抑えることを重視していることも否めないであろう。そしてそれは3歳から6歳までの間にはあまり変化していかない可能性があることも示唆された。だからといって、保育者の子どもに対する熱意のある継続的な働きかけは効力を持たないわけではない。事実、卒園後の子どもたちとの交流から、本研究に協力をいただいた幼稚園の園長先生は幼児期に攻撃性の高かった男児たちが現在小学校の3年生では安定した行動制御を見せることを報告している。このことは今後、幼児期と児童期の発達との関わりを、あるいは幼児教育と小学校教育の連携を考える上で興味深い示唆を与えてくれる。

#### 3. 幼児の社会性の発達と認知能力について

本研究は子どもの社会的場面における自己制御の発達を調査するため、絵画自己制御能力テストの実施、幼稚園の教師を対象とした子どもの自己制御の発達に関する質問紙調査を行ってきた。けれどもこれ以外にも、同園の協力を得て、子どもの絵の発達についても調査を実施してきた(鈴木・柏木, 1999)。この子どもの絵の発達の調査の一部からグッドイナフ人物画尺度の得点のデータが得られている。

そこで一つの試みとして、ここで子どもの社会性を測る尺度と子どもの認知能力を測るグッドイナフ人物画尺度の対応関係を見てみよう。

さきの Michelson ほかは知能と社会的スキルの関連性、特に知能と子どもの主張性とのかわりについて次のように述べている。

「知能と主張性に関係があることはそれほど驚くべきことではない。おそらく、知能は主張スキルを獲得する際に力となるであろう。そして、次にはこのスキルが人とのやりとりや学習の機会を広げるのである」。

グッドイナフ人物画尺度から算出された子どものIQと年少から年長までの絵画自己制御能力テスト、質問紙による教師評定、日誌の否定的コメントとの対応関係を見たものが表8である。

年長のTQによる自己抑制の発達、および3年間を通しての発達とIQの間には5%の水準で正の相関がある。しかしながら一方で、絵画自己制御能力テストとの3年間を通しての抑制回数との間には5%の水準で負の相関が見られる。

日本の子どもたちの自己制御の発達を見た時に、Michelson ほかの欧米での視点とは異なり、子どもの認知能力と自己抑制の発達との間に何らかの対応関係がある可能性が示唆された。

いくつかの研究において、子安(1999)はこれまで問題解決などの場面で発揮されるアカデミックな知能と対人場面で発揮される社会的知能の間に有意な関係が見い出されなかったことについて次

表 8. 子どもの社会性と認知能力との相関

	IQ 平均	日誌 POS	日誌 NEG	TQ/ASS	TQ/INH	PSRT/ASS	PSRT/INH
3年間	1.00	0.35	- 0.31	- 0.17	0.50 *	0.38	- 0.44 *
年少	1.00	0.33	- 0.17	- 0.24	0.21	0.04	- 0.42
年中	1.00	0.24	- 0.33	0.06	0.37	0.42	- 0.21
年長	1.00	0.16	- 0.19	- 0.14	0.45 *	0.17	- 0.05

\* $p < .05$ 

のような見解を述べている。

アカデミックな知能は、少なくとも論理 - 数学的知能，言語的知能，空間的知能など複数の相対的知能から構成されていると考えられるが，社会的知能もまた個人の識別能力，他者の認知・感情の推測能力，自己の認知・感情の表出能力，社会的文脈の理解能力など複数の概念から構成されている。

今回，グッドイナフ人物画尺度と自己制御機能の発達との間に明確な関わりは見い出されなかったが，今後子どもの空間的知能と社会的場面における自己制御機能の発達について研究することは有意義であると思われる。

## 引用文献

金子智栄子・吉田公子・倉橋宏子・滋野志津子. (1997). 保育園での幼児のトラブルに関する研究. *母子研究*, **18**, 1-8.

柏木恵子. (1988). *幼児期における子どもの「自己」の発達*. 東京：東京大学出版会.

子安増生. (1999). *幼児期の他者理解の発達*. 京都：京都大学学術出版会.

Michelson L. Sugai D.P. Wood R.P. Kazdin A.E. (1987). *子どもの対人行動：社会的スキル訓練の実際*. 高山巖ほか(訳). 東京：岩崎学術出版社.

佐藤淑子・目良秋子・柏木恵子. (1998). 就学前児の社会的認知的発達に関する縦断的研究(1)：社会的場面における自己制御機能の発達. *発達研究*, **13**, 52-62.

佐藤淑子・目良秋子・田矢幸江・柏木恵子. (1999). 就学前児の社会的認知的発達に関する縦断的研究(1) - 2：社会的場面における自己制御機能の発達. *発達研究*, **14**, 27-36.

佐藤淑子・目良秋子・田矢幸江・柏木恵子. (2001). 就学前児の社会的認知的発達に関する研究(1) - 3：社会

- 的場面における自己制御機能の発達. *発達研究*, **16**, 33-51.
- 佐藤淑子. (2000). 幼児期の対人行動における自己主張のメカニズム. *鶴川女子短大研究紀要*, **22**, 53-58.
- 佐藤淑子. (2001). *イギリスのいい子日本のいい子*. 東京：中公新書・中央公論新社.
- 鈴木忠・柏木恵子. (1999). 子どもの絵の「子どもらしさ」の分析. *発達研究*, **14**, 53-61.
- 田島信元・柏木恵子・氏家達夫. (1988). 幼児の自己制御機能の発達：絵画自己制御能力テストにおける4-6歳の縦断的变化について. *発達研究*, **4**, 45-63.